＜報告＞

指導案作成における学生の課題
－保育者養成短期大学の学生を対象として－

Challenging Issues of Students in Preparing a Guidance Plan：
Cases of Students at Nursery Teacher Training Colleges

桐　川　敦　子[1)]　室　井　眞紀子[2)]　目　良　秋　子[3)]　松　崎　史　周[4)]

Atsuko KIRIKAWA, Makiko MUROI, Akiko MERA and Fumichika MATSUZAKI

Abstract

The objective of this study was to detect challenging issues of students at nursery teacher training colleges in preparing a guidance plan. The author conducted a four-point scale questionnaire survey directed at junior college students. Results revealed that the item "I have images of children when I prepare a guidance plan" had the highest mean score, indicating that students consciously visualize images of children when preparing a guidance plan. The survey results also elucidated the theme of this study, of the challenging issues of students in preparing a guidance plan. Students with less confidence in preparing a guidance plan experience stronger difficulty in 1) "considering how to finish activities," 2) "understanding points of assistance," and 3) "writing sentences." Further examination is required on how to address these issues.

Keywords : *guidance plan, nursery teacher training, writing sentences*

Ⅰ．問題の所在と研究目的

幼児教育のカリキュラムは他の学校種と異なる性質を持っている．すなわち，それは幼児の主体的な環境との関わりを確保することを前提として，幼児が生活や遊びの中で，ものや人の様々な環境と出会い，それらとのふさわしい関わり方を身に付けていく過程を通して，「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」に示される保育内容の５領域に示すねらいを総合的に身に付けることを重視しているということであり，その実現に向けて，幼稚園，保育園においては，「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」に基づき，教育課程・全体的な計画を編成したうえで，子どもの実態と照らし合わせながら長期および短期の指導計画を立て，保育，教育を行っているということである．また，認定こども園においても，「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に基づきながら，幼稚園，保育園と同様，保育，教育が行われている．

保育者は，子どもの実態と照らし合わせながら保育を実践するために，日々，幼児一人一人の言動を理解するよう努め，子どもの活動を予測しながら綿密な計画を立てる必要がある．そして，このことは教育実習や保育実習にあたる学生にも求められ，実習生は，短期間に子どもの実態を捉え，保育の流れや展開をイメージし，見通しを持って保育を行えるよう指導案を書く必要がある．しかし，指導案の作成に対して苦手意識や困難感を持つ学生の多いことが，先行研究において報告されている[6)9)11)]．

保育者養成校では，教育実習指導や保育実習指導を含め様々な授業の中で，作成の方法や手順，具体的な書き方，参考例等が詳細に示されたテキストを用いるなどして，指導案立案や書き方などの指導がなされている．だが，そうした指導の工夫にもかかわらず，学生の指導案作成に対する苦手意識は解消されていない．その点については，指導方法に関する研究報告や学生の文章表現に関する問題点の指摘は散見されるものの[2)4)6)8)13)]，そもそも学生が指導案作成のいかなる点を苦手としているのかということについて研究が深まっていないことに起因している．

本研究では，保育者養成校の学生が指導案作成のい

1）日本女子体育大学（准教授）
2）帝京短期大学（講師）
3）白百合女子大学（准教授）
4）日本女子体育大学（講師）

かなる点を苦手としているのかについて探るものである．指導案作成にあたる学生の課題を明確化することは，指導案を指導する際に役立つものと考えられる．

Ⅱ．学生の苦手意識および指導にかかわる先行研究

ここではまず，学生の指導案に対する苦手意識を探る先行研究を挙げることにする．

林（2018）は，「子どもの姿をイメージする」，「主活動を考える」，「ねらいを考える」，「内容を考える」，「環境構成を考える」，「活動の展開を考える」，「教師の援助を考える」といった指導案作成の各過程において，学生がどの段階を難しいと感じているのかについて，実習の前後に調査を行った．そして，実習前には「ねらいを考える」及び「内容を考える」ことに，実習後には「活動の展開を考える」及び「教師の援助を考える」ことに難しさを感じていることを明らかにした[1]．しかしながら，各過程のどのような点にどの程度の苦手意識を感じているのかなど，さらなる研究の積み重ねが必要である．

筆者らも過去に指導法の研究を行う際に，指導案作成時に学生が感じる課題について調査を行った．短期大学２年生229名を対象に「指導案作成において難しいと思うこと」について自由記述形式のアンケートを行い，記述内容をKJ法に準じた分類方法でコーディングした．その結果として「保育を構想する力の不足」と「指導案記述に対する不安」の２つのカテゴリーを抽出したが，各課題がどの程度感じられているのか等の詳細についてはわかっていない[8]．

なお同研究では，学生の指導案作成において，保育現場の映像を視聴することの効果も明らかにしており[8]，このことは今後の指導に役立つものである．若尾ら（2015）によると，映像視聴については多くの教員が授業で取り上げ，教育・保育の現場の実際の様子を伝えながら，理解力や学ぶ意欲が低いと感じられる学生に対応しようとしているとのことであり，指導案作成の指導において，今後も研究が積み重ねられられていくことが期待される[14]．

以下，学生が指導案作成のいかなる点を苦手としているのかについて探り，考察する．

Ⅲ．方　　法

１．調査対象と期間

調査対象は，２年制保育者養成Ａ及びＢ短期大学２校の，2018年度２年生127名で，男女の内訳は，男子学生９名，女子学生118名である．調査期間は2018年６月，２週間の教育実習開始直前の時期に行った．学生たちはすでに教育実習に備えて指導案作成の指導を受けていた．

２．調査項目と手続き

室井･桐川（2018）[8]をもとに作成したアンケート「指導案作成に対する意識調査」の調査項目は以下の11項目である．

指導案作成に対する意識項目「指導案作成時に子どもの姿を想像している」，「子どもの発達の理解を生かして作成している」，「援助の留意点を理解している」他７項目，文章に関する苦手意識を調べるための項目「文章を書くことに苦手意識はない」である．さらに，指導案作成に関する不安感を調べるために，「指導案を書くことに不安はない」という項目においても回答を求めた．

アンケートは筆者らの担当する授業時に実施した．学生には，この調査は成績には関係がなく，無記名であること等を説明し，承諾した者に対してアンケート記入を依頼し，その場で回収を行った．また，各項目について「そう思う」を４点，「やや思う」を３点，「あまり思わない」を２点，「思わない」を１点とした４段階評定で回答を求めた．分析は統計ソフトSPSSを用い，統計的手法で行った．

Ⅳ．結　　果

有効回答数は127であった．分析の結果を以下に示す．

１．各項目の平均

⑴　11項目の平均値

まず11項目における回答の平均値を調べた（表１参照）．平均が最も高かったのは，「指導案作成時に子どもの姿を想像している」の平均値3.45（.54）で，最も低かったのは，「文章を書くことに苦手意識はない」の平均値2.44（1.04）であった．

⑵　項目「指導案を書くことに不安はない」の平均値

「指導案を書くことに不安はない」の平均値は，2.03（.98）と低かった．

2．指導案を書くことへの不安感と指導案作成に対する意識の関連

指導案を書くことに対して不安感を持つ学生が，指導案作成のいかなる点を苦手としているのか，不安を抱く要因は何かについて調べるために，不安感が高い学生と低い学生を分け，指導案作成に対する意識の各項目の平均値の差の検定（t検定）を行った（表1参照）．不安感の高低については，指導案作成に対する不安の平均値で不安感が高い群（82名）と低い群（45名）に2分した．その結果，「文章を書くことに苦手意識はない」（高群：平均値1.95，SD.91，低群：平均値3.33，SD.56，t＝10.51，p＜.001），「援助の留意点を理解している」（高群：平均値3.11，SD.69，低群：平均値3.36，SD.57，t＝2.05，p＜.05），「活動の終え方を考えている」（高群：平均値2.95，SD.77，低群：平均値3.27，SD.58，t＝2.40，p＜.05），において有意な差が見られた．特に文章を書くことへの苦手意識については大きな差が見られた．

Ⅴ．考　　察

上記の結果を踏まえ，不安感の強い学生は，活動を終え方を考えること，援助の留意点の理解，文章を書くことについての3点を課題としていることが読み取れた．これらの課題の背景や今後の指導の在り方について以下に考察する．また，その他全体の平均値が高かった項目や，他の項目と比べやや低めであった項目についても考察を述べる．

1．活動の終え方を考えることについて

不安感の高い学生が，活動の終え方を考えることを課題としていることについて，その要因は2つあると推測できる．

1つは，その教授方法に関する研究が進んでないことである．先行研究において活動の終え方を取り上げたものは寡聞にして知ることができない．前述した林(2018)の調査においては，指導案作成の各過程において課題を探ったが[1]，活動の終え方についてはやはり触れられていない．活動の終わりは，子どもがそれまでの活動を振り返ったり，余韻を楽しむ等，教育的に重要な時間となることが多く，全体の見通しを持って指導計画を考慮する必要がある．養成校において指導する側には教授法の研究に着手する必要があると考えられる．

もう1つは，養成校の学生の資質能力によるものである．若尾ら（2015）は，養成校の教員の多くは学生の資質能力に対する課題意識を持っていることを明らかにした．その中には「学生の基礎学力の欠如」や「学

表1　「指導案作成に対する意識」各項目の平均値と指導案作成不安によるt検定結果

項　　目	全体平均値（標準偏差）	不安の低い群平均値（標準偏差）	不安の高い群平均値（標準偏差）	t値
1．指導案作成時に子どもの姿を想像している	3.45（.54）	3.49（.51）	3.43（.57）	.61
2．子どもの発達の理解を生かして作成している	3.11（.58）	3.16（.56）	3.09（.59）	.65
3．子どもの姿に応じてねらいの設定している	3.12（.65）	3.13（.63）	3.11（.67）	.20
4．子どもの姿から活動を考えている	3.16（.65）	3.13（.66）	3.17（.64）	－.31
5．年齢に応じた活動を理解している	3.26（.61）	3.18（.58）	3.30（.62）	－1.13
6．活動の終え方を考えている	3.06（.72）	3.27（.58）	2.95（.77）	2.40*
7．導入について考えている	3.41（.58）	3.47（.50）	3.38（.62）	.82
8．援助の留意点を理解している	3.20（.66）	3.36（.57）	3.11（.69）	2.05*
9．時間配分を理解している	3.09（.65）	3.20（.63）	3.02（.65）	1.50
10．子どもが集中できるよう考えている	3.20（.61）	3.31（.56）	3.15（.63）	1.47
11．文章を書くことに苦手意識はない	2.44（1.04）	3.33（.56）	1.95（.91）	10.51***

*p＜.05，***p＜.001

生の理解力の欠如」なども挙げられている[14]．後述する記述に対する課題も考慮すると，学生によっては指導案を終わりまで書き上げるのにかなりの時間を要していると推測できる．授業時間に書き上げられず，集中力が途切れることもあると思われる．このような学生のサポート対策についても取り組む必要があると考えられる．

2．援助の留意点の理解について

本調査対象学生の授業担当者は，援助の留意点について授業の中で，子どもが主体的に考えたり，試したり，行動したりするよう，保育者はどのような点に留意して援助をするのか，なぜその援助を行なうのかについて考慮し，「保育者の意図を書く」指導を行っている．しかし，小山(2015)[5]でも指摘されているように，多くの学生に,「～をする」など保育者の行動の羅列や，セリフを書き連ねる傾向が見られる．数回の添削指導後，改善がみられる学生もいるが，半数は改善が難しく，指導が定着しない．今回の調査もその点や，指導後にも援助の留意点の理解に対して困難を抱えている学生が存在することを浮き彫りにしたといえる．

保育者の意図を考えるにあたっては，子どもの姿を想像するだけでは不十分で，保育を通して子どもに何を経験してほしいのかという「ねらい」を含めて考える必要がある．そして，目に見える子どもの姿や行動だけではなく，その行動の要因となるものや人など環境との関係やその裏にある言動の意味など目に見えないことをイメージしながら，どのようなことに留意して援助をするかを考えていかねばならない．小川(1988)は，事実として表れていないことを想像するイメージが重要であり，このイメージ化する働きを「構想力」と述べている[12]．つまり，保育者の意図を考えるには，保育をイメージする力，すなわち保育を構想する力が求められると考えられる．実体験に乏しいと言われる現在の学生においては，特に援助の留意点とは何かを理解できるよう指導方法を工夫していく必要があり，例えば，映像を用いる際に，そのことがわかりやすいものを選ぶことが求められる．同時に，学生が保育を構想する力を身に付けられるよう指導法を探る必要があろう．この構想力の指導法については養成側の大きな課題といえる．

3．指導案作成につながる文章表現力の育成

本調査の結果から文章表現に苦手意識を持つ学生が多いとわかるが，指導案作成につながる文章表現力の育成はどのように行うべきか．保育者に必要な国語力育成を論じた松崎（2013)[7]を踏まえて述べていく．

保育学生の文章表現力の実態を鑑みると，指導案作成につながる文章表現力を育成するには，実習記録や指導案の指導に先立って，「日本語表現」などの文章表現関連科目において，基本的な文章表現の知識・技能を養うことが必要となってくる．指導に際しては，表記・語句・文法の観点から文章を検討し，文章の不備に気づかせ，適切に修正する技能を養い，そのうえで，自分の書いた文章をチェックさせ，不備のない文章に仕上げる習慣作りを行っていきたい．

文章表現のきまりが認識され，文章を自覚的に書く姿勢が形成されてきたら，実習科目において指導案の書き方を指導していく．基本的な文章表現力が身に付いた学生であっても，初学の段階で指導案を書くことは難しい．それは，どのような表現を用い，どのようなことを書けばいいのか，指導案の文章イメージが形成されていないためである．指導に際しては，保育書籍や雑誌などに挙げられた表現例を挙げながら指導案の書き方を解説し，指定の設定で学生に実作を行わせるのが有効であると思われる．

指導案記述のイメージが付いたところで，指定の設定で部分指導案を作成させていく．事例や映像を頼りにして指導案を作成させ，作成した指導案は学生間でピア・レスポンスを行って自己修正させるとともに，教師の方からも模範例を挙げながら記述のポイントと注意点を示していくようにする．

ただ，こうした取り組みは保育者養成校ですでになされているもので，取り立てて目新しさはない．にもかかわらず，文章表現に対する学生の苦手意識が解消されていないのは，こうした取り組みが十分になされていないことや文章表現科目担当者と実習科目担当者とで学生の状況や指導内容に関して情報共有が図られておらず，上記のような段階性が踏めていないことに原因があると考えられる．文章表現に対する学生の苦手意識を精査し，指導案作成に向けて各科目の指導の内容と方法を協議するなど，科目（担当者）間で連携して指導に当たる体制づくりも養成側の大きな課題である．

4．指導案作成上のその他の意識

以上，本研究テーマである学生の課題について考察してきたが，本調査では，上記の 3 つの課題だけでは

なく，次の２点も読み取ることができた．

⑴　子どもの姿の想像および子どもの発達の理解について

本調査では，学生が，その時々の子どもの姿を捉えることについて意識していることが読み取れた．各項目の平均値で,「指導案作成時に子どもの姿を想像している」が最も高かった．冒頭で述べたように，保育者には幼児一人一人の言動を理解するよう努め，子どもの活動を予測しながら綿密な計画を立てる必要があるが，学生たちはこの点を意識していると見られる．このことは，指導法に関する研究の深化や養成校教員の様々な工夫が効果をもたらした結果と思われる．どのような工夫が良い効果をもたらしているのかについて特定はできないが，前述した，視聴覚教材を用いた指導の効果もあると考えられる．今後は子どもの姿を想像する際に土台となる，子どもの発達の理解も深めるとよいと思われる．今回の調査においては,「子どもの発達の理解を生かして作成している」の平均値がやや低めであったが，どのように発達を理解するかは保育全体の方向を左右する重要な視点である．各年齢の知的能力の発達，運動機能の発達，人間関係の発達，言葉の発達，遊びの発達など，子どもの発達について学ぶべきことは多く，学生は様々な授業の中で学習しているが，知識の定着は不十分であり．しっかりとした知識を持ち，実習に臨み，指導案に取り組めるよう，さらなる指導をしていかねばならない．一方，学生が子どもの発達の特徴にとらわれすぎて，子ども理解を深めようとする努力を怠ってしまうようではならない．小櫃・守他（2017）は子どもの発達を理解するうえで重要なことは，子どもの変化の底にある心理的な面を見極め，その変化が長期的に見て，どのように変化していくか見通す力を身に着けることだと述べている[10]．発達の特徴に子どもを当てはめるためではなく，より良い保育の働きかけを見出すために知識を得られるよう，考慮しながら指導してく必要があり，今後，その方策を探っていかねばならない．

⑵　時間配分の理解について

「時間配分を理解している」の平均値も他の項目の平均値と比べるとやや低めであった．時間配分を考えるためには，子どもたちがそれぞれの活動にどのくらい時間を要するかあらかじめ知っておく必要がある．例えば実習生が活動を提案する場合には，絵本や紙芝居を読むのであれば事前に読み，所要時間を計っておくことや，製作などの活動の場合は道具を取りに行く時間や，材料を配布する時間，個々の子どもが活動にかける時間の差なども考えねばならない．手を洗ったり，着替えをしたりする時間も捉えておく必要がある．また，時間配分を考えてもその通りにいかずに，時間が不足したり，逆に余ったりする．指導案は仮説ともいえ，実際の具体的な指導においては指導案によって方向性を持ちながらも，子どもの活動に応じて柔軟に展開することになるためである．指導案作成時にはそのような際の対応についても予測せねばならない．学生には，多くのことに考えを巡らせることの必要性に気付くよう，指導することが求められる．やはり保育を構想する力が重要と考えられる．

久富（2009）は，指導案を書くことは，保育をデザインすること，つまり子どもの生活をデザインすることであるので，一日の生活のながれを重視しながら時間配分を考えていくことが大切であると述べている[3]．実体験が不足しているといわれる現在の学生にはこのような学習に困難な点があることが予測されるが，克服するためのサポートについて考えていく必要がある．

Ⅵ．今後の課題

今回は短期大学の学生について調査を行ったが，今後は本学を含めた４年制大学の学生について調査を行い，短期大学の調査結果と比較することを予定している．その上で，考察において述べた点を踏まえた指導を，今後短期大学の２年間の中でどのように展開していくべきか，検討していきたい．

引用文献

１）林理恵（2018）短期大学の学生の保育指導案作成に関する考察－幼稚園実習での学びに着目して－，幼少年WEB ジャーナル第１号：13-20

２）開仁志（2007）保育実習の効果的な指導の在り方，富山短期大学紀要第42巻：17-30

３）久富陽子（2009）幼稚園･保育実習指導計画の考え方･立て方，萌文書林

４）金瑛珠（2017）保育･教育課程を学ぶ授業における指導案指導のあり方についての一考察－順序性について考える－，未来の保育と教育 東京未来大学保育・教職センター紀要第４号：55-63

５）小山優子（2015）保育者の力量形成を促すカリキュラムの検討（Ⅱ）－学生の日案作成の習得過程から－，島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 53：115-125

6）栗岡洋美(2017)指導案作成の教授メソッドー段階的指導のありかたー，中京学院大学中央学院短期大学部研究紀要第47巻第１号：21-30
7）松崎史周(2013)保育者養成短期大学における国語力育成のあり方，清泉女学院短期大学研究紀要第31号：１-11
8）室井眞紀子･桐川敦子（2018）指導案作成時に学生が感じる課題意識－映像視聴前後の変化についての検討－，帝京短期大学研究紀要第20巻：43-50
9）菜原桂子･小林美華（2017）幼稚園教育実習･保育実習における指導案の現状と課題，北翔大学短期大学部研究紀要第55号：139-145
10）小櫃智子・守巧・佐藤恵・小山朝子（2017）幼稚園・保育所・認定こども園実習パーフェクトガイド，わかば社
11）大滝まり子(2008)幼稚園実習における指導案作成の留意点，北海道文教大学研究紀要第32号：49-56
12）小川博久(1988)３．幼児の実態把握におけるイメージの重要性，保育実践に学ぶ，建帛社：242
13）副島雪子･中島一恵（2009）学生の国語表現に関する報告－保育者養成の視点から－，長崎女子短期大学紀要第33号：110-116
14）若尾良徳・桐川敦子・目良秋子・岡部佳子・佐藤有香・後田紀子(2015)保育者養成課程の講義科目における授業の課題および授業方法の実態－保育者養成課程の教員へのインタビュー調査－，養成課程研究会紀要第１号：27-40

参考文献

・永井聖二・神長美津子（2011）幼児教育の世界，学文社
・中島寿子･大森洋子（2014）保育者は一日の保育をどのように構想するのか，山口大学教育学部研究論議第３部：161-174
・田中敏明･安東綾子（2016）保育指導案の形式と内容に関する考察－保育指導案の統一の必要性，九州女子大学紀要第52巻２号：117-130

（2018年９月12日受付
2018年12月12日受理）